

会報三月号 易経から学ぶ 序卦伝【下経】1/2

易経は、天地の道理を手本として人間の道を立てたものである。易経は本文(経)と、その解説(伝)からなる。中身の詳細は勉強会に譲るとして、今月と来月の二回で、伝(十翼)のうちの一つである「序卦伝」を参考に、六十四卦の順序を学び、天地自然の性質と働きと、人間の世に処する心得を確認しておきたい。

世界は陰陽裏表がある。多少の危険を感じると、すぐに尻尾を巻いて逃げ出すような態度じゃ、千年生きても人生は開けない。あらゆる艱難辛苦、栄枯盛衰、利害得失、喜怒哀楽、陰陽裏表の経験を嘗め尽くして手に入れるもの、楽しむもの、それが人生だ。人生も世界も、もっともっと大きく大きく高く深く、そして豊かなもの。

意気地なし、軟弱、甘え、天邪鬼：そういう心も分かるけど、人生を強く、豊かに、楽しんで処していくためには、要らない。それを先哲は易経を以て私たちに伝えてくれている。

目次

・下経(三十一〜六十四)

●易経(序卦伝)【下経】天地の働きに倣った人間の世に処する心得↓易経は天地自然の道を本として、人の道を示したもの。

三十一、【澤山咸(たくざんかん)】

天地があっても、離れ離れになっただけでは何の働きもできない。世の中のものはお互いに感じ合って、お互いに力を添え合うことによって発達する。人間関係も然り。夫婦親子兄弟君臣：、お互いに感じ合って、即ち誠心と誠心を以て相対して、その間に感応が起こる事が最も大切である。この働きがあって初めて物が相対して存在していることに深い意義がある。

そこで、この「感応」を出発点として、自然も社会も解釈していく。お互いに感応する、これが【澤山咸(たくざんかん)】である。咸とは交感である。この咸は「感」の下にある「心」がない。これは無心にして感じ動くという意味である。心には人心と道心がある。こう二つに分けた場合、人心とは利己心・私利私欲であって、この「無心にして動く」の無心とは、人心(利己心・私利私欲)を持たずに動く、つまり道心で動くという意味である。

まず天地が根本。天地が無ければ誰も生きていくことはできない。天地あつての万物である。しかし、万物が栄えていかなければ、天地があつてもその存在の甲斐がない。万物を生み出し、万物を育てていくことに天地の満足があると考ええる。

そして、万物を主宰して天地の道を伸ばしていくのは人間である。太極が天地二つに分かれたように、万物も陰陽（男女・雄雌）の別が生じる。男女の別があるのは、その種族を保存していくためであり、男女（陰陽）はそれぞれ別の役割があり、お互いに親しみ合い、助け合い、敬い合うことを忘れてはならない。

まず夫婦があれば子供が生まれ親子の関係が出来てくる。また親子の関係から家が永く続いていくことになれば、家と家との秩序・統一が必要になり、ひいては国ができる。人間が一緒に住んで共栄を図るという本性から、国を作る働きが生み出される。国がある以上、君臣という上下の別が生じ、それぞれの立場で国の発展に力を尽くしていく。上下の別があれば、そこに礼儀も備わり、全体として健全な発展を目指すのである。礼儀の根本は、どこまでも人間がその誠心と誠心を以て相接して、お互いに感じ合う、親しみ合い頼み合うことでなければならぬ。人間同士、誠心を以て感じ合うことは尊く、それ故に人生に張り合いが生まれ、人はそれを頼りに生きているとも言える。

ただ、人間の道が行われるということは、決して道理一辺倒でできることではない。道理の上から言えば、各々が利己心を捨てて一致協力していくことで、結局自己を全うできるというのは当然である。しかし、道理がそうであっても、人間は利己心、私利私欲に囚われるというのをもまた免れないことである。特に社会がこのように複雑になると、他人のことを考えている余裕もなく、己ひとりの身を立っていくだけでも容易ではないので、道理はどうあれ実際には理屈に反することも行われる。それはやむを得ないことである。そこで、実際に健全に発達する社会を作っていくためには、ただ理屈だけではなく、感情において、不正なことをしては心地よくない、お互いに力を合わせると心地よく、喜びを感じるといった気分を養うことが大切である。

三十二、【雷風恒（らいふうこう）】

そこで、「感じ合う」ことの最も代表的なものとして夫婦の道（勿論、他の関係でも）がある。それは一時的に親しみ合うのではない。一時的な所謂気まぐれで人を好きになるというのは、またしばらくすると嫌いになってしまうので、これは頼もしくない。愛し合い睦み合うことが永く続かなければ親しみ合う甲斐がなく、協力一致の実を挙げることも発展も難しい。久しく続くことで効果が現れてくる。感応した後は長く親しみ合う、身の上に如何なる変化災難が来ても正しき所（信義）に於いては変わらないこと、これが【雷風恒（らいふうこう）】である。恒とは久しいという意味であり、物事がしっかりと定まって、これから続いて栄えていく見込み（道筋）が立った状態である。そもそも物事は絶えず進んでいくべきものなので、止まってしまうたらそこから衰えていく。人間の働きでも、国の状態でも、絶えず進み絶えず新

たになってこそ、永く栄えていくのである。衰退を防ぐには絶えず進歩していくという心を心掛けなければならない。「大学」にある「日に新たなり。日々に新たなり。また日に新たなり」と同じことである。

従って、恒とは「止まっていて変わらない」ということであってはならない。花は咲いたら散るし、月は満ちたら欠ける。それは変化である。しかし、春になればまた花は咲くし、また欠けた月は十五日経てば満月になる。これは変わらない。つまり、変わるものの中に変わらない道があって、初めて物事は健全にその存在を保っている。

恒とは「止まっていて変わらない」ものではなく、「動いていて（進んでいく状態が後戻りしないで）変わらない（続いていく）」ものという意味である。

三十三、【天山遯（てんざんとん）】

しかし、物事は久しいばかりではない。新たになること、時代に応じて変化するということも考えなければならないし、久しき中にも衰えていき力を失っていくものもある。当初の協力一致の姿が変化が起こったのである。

そこで、永く世のために力を尽くしたなら、自ら退いて後進に譲ること、入れ替わることも大切になる。また、小人が盛んになる機運には、その小人を恐れ従って難を逃れようとしたり、小人によく和して合わせるというのではいけない。我の道も徳も失ってしまう。

進むべき時に進み、退くべき時に退くことが、晩節を汚さずに今までの尽力を全うする道である。退くべき時に退く、これが【天山遯（てんざんとん）】である。遯とは退くという意味である。世の中の機運というものは久しく同じ状態が続くものでもない。よい時機もあればそうでない時機もあるのだから、その悪い時機には禍を避けて身を全うし、志を同じくする人を段々に養成して、次に備えるのである。

三十四、【雷天大壯（らいてんたいそう）】

退く者がいれば、これに代わって大いに努力する者も出てくる。もし皆が一身の無事を図っていたのでは、事業も国も発展しない。物事の進歩発展は陰陽対原理によるので、発展していないなら退化していることになる。

為すべきことを為して退く人も尊く、退く人の後を受けて、何があっても屈せず大いに力を伸ばそうと覚悟した人も尊い。

また、退いたとしても、何時迄も退いたままではいけない。新たに進む所があれば潔く強く壯（さか）んに出て行くことが大切である。しっかりと動かず気力盛んな状態、発展の機運に向かっていている状態、これが【雷天大壯（らいてんたいそう）】である。大壯とは、気力盛んにして強くしっかりと動かないこと。力が充実している状態である。

この気力の充実は、大事に当たる人はどうしても必要である。物事を進める上に於

いて、何事であっても困難はあるので、困難に屈したり、避けてばかりいるようでは事は成らない。

天徳は剛であり、天行は健である。また、天道は正大である。「正」とは「一（天）」に「止まる」であり、「大」とは「一（天）」に「人が従う」ことである。つまり、「正大」は天地の情にして、人間が則るべきところである。人能（よ）く天地の情を会得し、卓見遠識を有し、兼ねて世態人情に通じ、その身を処すること剛大にして直ならば、天徳に適し、天行に合致し、大壮の気が浩然として天地の間に満ちる。

従って、人が志義を掲げ、その志（目標）を達成するためには、何があっても屈しないという気概（義）を以て立ち、剛健であることが不可欠である。

しかし、この盛んな時というのは大いに戒めなくてはならない。人間の情として、苦しい時には自ら戒めることはできるが、一度志が達せられて得意の時にになると、ついで心が緩む。緩んだ心の隙間に禍（人災）が生ずる。従って、常に己を戒め、始めの緊張を忘れてはならない。つまり「貞に利し」である。強ければ強いほど正しき所から外れてはいけない。

※進退の道は、【天山遯】【雷天大壮】に説かれている。全て人間の道というものは、「進退」の二つが大切なのであって、退くときは退き、進むべきときは進まなければならぬ。

三十五、【火地晋（かちしん）】

そして、努力の上にも努力を重ねていくという徹底した心持ちが、大事の成就には必要である。努力を重ねて進む、世の中が益々進んでくる、それが【火地晋（かちしん）】である。晋は進むの意。太陽が東の空から出てくる様子が晋である。

いくら勢いがある盛んであっても、そこに満足せずに更に更に進むことに努めることが大切である。そうして皆を安んずることが、その目指す所である。

※易には「進む」の意味を表す卦が三つある。【火地晋】【地風升】【風山漸】である。【晋】は日の出の様子、【升】は木の成長の様子、【漸】は山の木々が徐々に高くなっていく様子を以て、その違いを示している。進む度合いが大きい順に、晋・升・漸である。

三十六、【地火明夷（ちかめい）】

しかし、進めば壁に突き当たる。必ず破れ傷付くことが出てくる。日月の明かりが雲に遮られるように、誠心を尽くしてもこれを妨げるものがある。その誠心を通らず、力を尽くそうとしてもその目的がなかなか達せられない状態が【地火明夷（ちかめい）】である。明夷とは、盛んなるもの（明）が敗れる。つまり、妨げられたり、

衰えたりすることである。

しかし、いつまでも遮られて地下に潜んでいるものではない。本当に世の中に向けて誠心を尽くす人は、一時如何なる災禍（天災・人災）に遇っても、そのために努力を捨てるといふことはない。その妨げが大きくて自分一代では思うところを達することができないこともあるが、誠心を以て尽くした力というものは、簡単に滅び尽くすものではない。後に到ってその志を継ぐ者が現れた時に、その努力は必ず大きな効果を来たす。また、至誠を以て世のために尽くした事績というものは、永く後世まで大きな教訓となるから、世に用いられないからといって失望することはない。しかし、志が達せられないというのは残念なことであり、悩みも多くなる。

陰陽相対原理からすれば、物事はただ努力すれば良いというものでもない。いかに勝れた人でも、その力を示すことができない時期もある。世の中は智愚不肖善人悪人相俟ちて社会を成すは古今の常態であり、機運に従って互いに消長を為すのである。

盛んなるものは必ず衰えるから、盛んなるときに衰えた時のことをよく考えて、自らを戒めることが最も肝要である。

三十七、【風火家人（ふうかかじん）】

衰えた状態を、また盛んな状態に引き戻すには、人々がお互いに力を合わせ親しみ合うことが必要である。不遇な時期は、いじけたり誰かを妬んだりするのでは無く、退いて自らの力を養うこと。その力の原点は、整った家である。

家を整えるとは、男がまずしっかりしていなければならぬが、家の中のことは女の努力に負うところが大きい。男が外で活躍できるのは、それだけ女の力によって内に養われるところが大きいということである。家が整わずに、社会や国が盛んになり、天下が平らかなになるものではない。家の中で親子兄弟夫婦が親しみ合い励まし合う所にある。やがてそこで養った力は外へ伸びていくから、養うという事に於いては家が大切である。家で家族が親和して心身を養う、これが【風火家人（ふうかかじん）】である。

三十八、【火澤睽（かたくけい）】

しかし、家族同士の親しみが狎れ合ってしまった、反省や志を失うと家族が背き合うようになる。家に限らず、一つの集合体・組織にはそういうことがよくある。背き合うこと、それが【火澤睽（かたくけい）】である。睽とは乖（そむ）く意で、心が離れ離れになっていくこと、協力一致を欠くことである。それはまず目に現れる。

人間はそれぞれ立場もあり、性格も違うので、たとえ善人同士であっても離れ離れになりやすいのが普通かもしれない。しかし人間は、離れ離れになるのがその本性ではないのだから、深く反省して、我を捨てて和合するように努めなければいけない。

物事は極まればまた反転するので、背き合っても善くこれに処すれば、また和合していけるものであり、そういう意味も含んでいる。内心は平心和氣にして、外は

機を知り、徐々にこれを転移していく。これが睽を合わせてく善術である。

三十九、【水山蹇（すいざんけん）】

相背き、互いに反対を唱えて騒ぎ、一家が不和になるに従って、必ず困難や禍いが起こってくる。進退ともに困難、それが【水山蹇（すいざんけん）】である。蹇とは困難・禍いであり、立てず、立っても足を挙げて歩むことができないという意味である。

人間は、家でも国でも必ず困難に遭遇することがある。その時に、その困難を乗り越える意気精神が堅固であるか、あるいは意気消沈しているかによって、その将来が決まるのである。困難に処する心構えとは、つまり絶対に退歩的であってはならない。何でも進んで困難に打ち克つという気概がなければいけない。困難がなかった昔が恋しいという様な、そんな軟弱な引つ込み思案では、世の中についていくことはできない。また、教えを受けられるような大人を求めることも非常に大切である。

四十、【雷水解（らいすいかい）】

しかし、いつまでも困難のまま、立てず歩めずで終わるといふ道理はない。「ダメでした」で終わってはならない。困難で動けないものは、「これではいけない」と気付き、少しずつ動き、皆と親しみながら努力していけば、皆動けるようになる。水の中から水蒸気が立ち昇って空に行って雷となり、そうして雷鳴がしているうちに雲が厚くなって雨を降らし、地上の全てのものを潤すような様子である。困難の中を抜けて問題が解決に向かう、これが【雷水解（らいすいかい）】である。解とは刀を使って牛を角に切っていくという会意であり、緩む・解決・脱する意味である。進んで為すべきことは素早くやらなければならない。遅ければ機会を失って事を誤る。

困難を脱する際は、徳に努力が必要であって、少し順調に向かったからと言って気が緩むようなことがあると、なかなか前に進めない。どこまでも努力して十分実力を養うことに意を用いなければならない。まだまだ難所はある。もし行き詰まりを生じたら、また立ち返って自分の力を養って出直すことである。無理をしても力が足りないければ難所は抜けない。

また、他の救援を得て、その困難を免れることでもあるが、やはり本人の努力と気が大切であることに変わりはない。

※この卦は上下を入れ替えれば【水雷屯】となり、この【雷水解】とは裏表を成す。困難の中で産みの苦しみとして動くは【水雷屯】であり、動いて陰難を脱するは【雷水解】である。

四十一、【山澤損（さんたくそん）】

しかし、解決してみると人間は気が緩む生き物である。気が緩み油断する。その油

断が失策を生み、その緩やかで締まりのない心が物を失わせる。気が緩んで損すること、それが【山澤損（さんたくそん）】である。損とは手に持っているものが、うっかり滑り落ちて失ってしまうことである。

また、万事節約して力を養って、後日大いに伸びて行く基礎を作らなければならぬ時である。ものには限りがあるから、際限なく発展することはできない。発展するためにはその力を蓄えなくてはならない。蓄えるために多くを働かない、所謂損をするのである。例えば、人の知力や時間にも限りがあるのだから、つまらないことに頭を使えば、大切なことに考えが足りなくなってしまう。損することを考え、損することによって初めて益することができるようになる。損を考えなければ力尽きるよりほかない。

※この卦は【地天泰】より来る。この卦は下卦の陽を損して、上卦の陰に益するのである。下卦の満るところの余りを以て上にこれを献上する。そこで下を損（へ）らして、上を益する。上は節度を以て止める。上はどこまでも下を富ませたいと思うその誠心が貫徹し、下が豊かになっているのは上の徳義のためであると恩を忘れず、余りある所を以て上の役に立ちたいと尽くす。お互いに誠心がある。す

四十二、【風雷益（ふうらいえき）】

気が緩んでいるならば、一つ二つはうっかり失っても仕方がない。が、際限なく失っていると、これではいけないと我が身を省みて私を慎まなくてはならない。

そして、自らを引き締めて、真摯に努力していく姿勢に変えれば、また段々と益するようになってくる。益していく、これが【風雷益（ふうらいえき）】である。益とは、一旦失ったものを段々と興して益を生じさせることである。

質素儉約に努めて力を蓄え、その結果力が益々増進して、その力が外に広がっていく有様を示したものである。努力に努力を重ねた結果、非常に発展してきた様子を表している。

益しては増し、益しては増して、戒めと努力を止めなければ満ちてくる。そして、満ちれば溢れるのが道理である。

※この卦は【天地否】より来る。この卦は上卦の陽を損して、下卦の陰に益するのである。上、政府の費用を節減して、下、人民の富を増やすときは、国家の事業が益々興る。特に農業が根本である。樹木を以て言えば、枝葉を選定して減らし、根っこを培養していけば、木は繁茂していくことと同じである。上を損するは損とは言わずに益という。その本を厚くするからである。逆に、上を益するは益するとは言わずに損するという。その基を剥いてしまうからである。下を厚くすること、よく損することが大切である。

四十三、【澤天夬（たくてんかい）】

物事は「満（盈）つれば欠ける」道理がある。水が増えていけば満ち溢れて決壊し外に出ていく。水が盈つれば、その上を切ってそこから水を四方へ流す。満を持しての決断、これが【澤天夬（たくてんかい）】である。夬とは円いものを欠いて割ること、くつついているものを切り離すこと、巧言令色や小人を打ち払いこれらを除くこと。害あるものを除いて、これを斬って放すこと。強く決断することである。陽の力を以て陰のものを圧迫してこれを排斥しようという有様である。排斥の方法には様々あって、急に戦いを起こして小人を滅ぼすのも一つの方補であるが、その弊害が大きく予想される時には、急に事を決することはかえって煩いを多くする原因になるから、徐々に正しいものの勢力を盛んにしていったって、小人が勢力を失うようにしていくことが適切な時もある。

仮に、善悪（物事が通るか通らないか）の区別が明らかであっても、その善を信じて断行する決心がなければ何の役にも立たない。決断自体は小さなことかもしれないが、世の中の多くの出来事はごく些細なきっかけで起こるものである。従って、物事を決するという意志は極めて大切である。世の中には、才智に溢れていながら、その決断力が足りないために、大して世の中の役に立たずに終わる人が少なくない。物事を決めるのに、大事をとって検討することもいいが、時期を失ってしまったら発展も何も無い。他のことを断って決める、決断することは非常に大切である。確固たる意思・判断力・決断力が足りなければ、何事も成就するものではない。どこまでも造化のために、その足を引っぱるものを切り離す方へ進んでいくのである。

四十四、【天風姤（てんぷうこう）】

強く物事を決断することができれば、人の力が集まり、善い機会に遇（あ）うことができる。ただ、この時の「遇う」とは、女が男に思いがけず遇って、男の意に適ったために段々信用されてくるようなことである。これは女の力が次第に盛んになっていくことを示している。

陰なるものから陽なるものへ思いがけなく出遇う、これが【天風姤（てんぷうこう）】である。姤とは、人と時が相遇うことであり、勝れた人物とそれを輔ける人物が相遇うことである。「相遇う」ことが物事の進歩発展の第一歩になる。「縁尋機妙、多宝勝因」をよく心得ることである。

しかし、陰陽相対原理では男（陽）が先に立って、女（陰）がそれに順い助けていくのが順当である。女（陰）が陽のような盛んな力を持つというのは、「陰陽」相俟つてではなく、「陽陽」となってしまうので、自然の理からすると宜しくない。組織や国においても、下の者の勢力が段々盛んになって上の者と対等になろうという状態を示す。下の者が認められるというのは善いことであるが、指導者と言う者は必要で、もし指導者なくして多数で物事を決めていくことになれば、それは健全なものではない。

確かに、物事を成していくには、人の力と自然の「時機」とがよく一致することが大切である。いかに力があってもタイミングが合わなければ立派な働きはできない。そして、機会は何度も来るものでもない。

四十五、【澤地萃（たくちすい）】

物事は相遇うて然る後に集まる。時と所と得れば、必ず人は人に遇い、大勢が集まって大事を成就できる。これを三つの間（時間・空間・仲間）という。

相遇うことが重なって大勢が集まる。出会い、それが新たな繋がりを生み、人が集まる、これが【澤地萃（たくちすい）】である。萃（すい）とは集まること。

物事を盛んにするには、多くの人の協力一致の力に寄らなければならぬ。君主たるものが努力を重ねることは勿論である。自分たちの努力によって国を益々善くしようという心掛けてあるから、必ず優れた人が集まってくる。志に人の心を集め、人を集め、貞正を貫いていくことが肝要である。天下が一家の如く、人が皆集まってくれば、どんなことがあっても様々な事が興る。

四十六、【地風升（ちふうしょう）】

大勢が集まれば、その中から勝れた者が出てくる。勝れた者を中心として、その集団は勢いを盛んにし、進歩発展へと向かわせなければならぬ。

そもそも、世の中は始終動いているもので、同じ状態に止まっていることはあり得ない。つまり、進歩しなければ退化する、善くならなければ悪くなるのである。それ故に、絶えず進歩発展を心掛けなければならない。努力して進歩発展へ進み、天を貫くように昇っていく、これが【地風升（ちふうしょう）】である。升とは昇る、つまり進歩発展である。昇るには極めて気を強く持ち、志と義を持つことが大切である。

人間の価値というものは、始めから認められるわけではないから、始めはどんなに低い地位であっても決して不平を起ささないで、その小さい仕事に全力を注いでいけば、やがて人にその価値を認められて段々重要な地位を得ていく。多くの人は自分の力を考えないで、何でも初めから大きなことをやりたいと思うから、却って失敗が多くなる。小さなことにも全力を尽くして怠らない人が能く成功を成す。勿論、人間には運の良し悪しもあるので、その運を得なければ志を達することはできない。しかし、自分にその力がなければ如何に好い運が来ても、その運をつかむことはできないので、まず自分の力を養うことを主としなければいけない。その実力さえあれば、やがて認められて力を振るうことができる。

自分に力がなくて高い地位を与えられるということは、運がいいことではあるが、これは不幸の始まりである。なぜなら、力がなければ永くその地位を保つことができないからであるから、自ら戒め省みて、その大任を引き受けることでなければならぬ。地位が与えられないというのは憂いでもなんでもなく、その徳力（仁義礼智）が

十分養われているかどうかが問題なのである。

四十七、【澤水困（たくすいこん）】

しかし、全ての道理は進み昇るばかりではない。進む時は進み、退く時は退くことを知らなければ物事は通らない。力とは有無を言わずに率いていくことであり、確かに、力ずくで行えば道理も引っ込むこともある。しかし、力に任せてどこまでも昇っていけば、必ず行き詰って、禍い・困難に陥る。それが道理である。

ものが不足し尽きて無くなり、その結果苦しむ、それが【澤水困（たくすいこん）】である。困とは困窮である。「困」の字は口の中に木があり、幹枝ともに伸びることができないという会意であって困窮艱難の意味である。

この困窮の中をしっかりと通り抜けることが出来れば、また新しく機運が開けていく。もし困窮に勇気が挫ければ何事も興らない。この「困」に遇って初めてその人の価値が現れる。困窮の状態は自然の成り行きに任せてはいけない。人の努力によって新しい局面を開いていくだけの覚悟が必要である。こういう時にこそ、大いなる努力を継続していかねばいけない。こういう状態の時は何を言っても社会は信用しないので、「耐えて行く」ことが大切となる。

苦楽は人生の常であることを覚り、艱難は天より我に幸福を与えんがための資本にして、心魂を錬磨する学校であると覚悟し、生き生きと艱難に立ち向かうべきことを、この卦は示している。困窮艱難が残念などと情けないことを思っではいけない。勇気を益々奮い起こし、胆力を養なって脱するのである。